

あいびき

イワン・ツルゲーネフ Ivan Turgenev

二葉亭四迷訳

青空文庫

このあいびきは先年仏蘭西フランスで死去した、露国では有名な小説家、ツルゲーネフという人の端物はものの作です。今度徳富先生の御依頼で訳してみました。私の訳文は我ながら不思議とソノ何んだが、これでも原文はきわめておもしろいです。

秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺かばの林の中に座していたことがあつた。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま煖あたたかな日かげも射して、まことに気まぐれな空ら合い。あわあわしい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、むりに押し分けたような雲間から澄

みて怜さ愼かし気げに見える人の眼のごとくに朗ほかに晴られた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かかに戦そいだが、その音を聞きたばかりでも季節は知られた。それは春先する、おもしろそうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話しし声こゑでもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒し舌やりでもなかつたが、ただようやく聞取れるか聞取れぬほどのしめやかな私語の声であつた。そよ吹く風は忍ぶように木末を伝つつた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のようすが間断なく移り変かつた。あるいはそこにありとある物すべて一時に微笑くしたように、隈くなくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思

いがけずも白絹めく、やさしい光沢つやを帯び、地上に散り布しいた、
細かな、落ち葉はにわかに日に映じてまばゆきまでに金色こんじきを放
ち、頭かしらをかきむしツたような「ペアポロトニク」（蕨あざみの類い）の
みごとな茎、しかも熟つえすぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限も
なくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。

あるいはまたあたり一面にわかにに薄暗くなりだして、瞬く間に
物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積つたままでま
だ日の眼に逢わぬ雪のように、白くおぼろに霞かすむ——と小雨が忍
びやかに、怪し気に、私語するようにパラパラと降つて通つた。
樺の木の葉はいちじるしく光沢つやは褪さめていてもさすがになお青か
ツた、がただそちこちに立つ稚木わかぎのみはすべて赤くも黄ろくも色

づいて、おりおり日の光りが今ま雨に濡れたばかりの細枝の繁味しげみを漏もれて滑りながらに脱けてくるのをあびては、キラキラときらめいていた。鳥は一ト声も音を聞かせず、皆どこにか隠ひそれて窺ひそまりかえツていたが、ただおりふしに人をさみした白頭翁しじゅうがらの声のみが、故鈴ふるすずでも鳴らすごとくに、響きわたった。この樺の林へ来るまえに、自分は獵犬を曳いて、さる高く茂った白楊はこやなぎの林を過ぎたが、この樹は——白揚は——ぜんたい虫がすかぬ。幹といえは、蒼味がかつた連翹れんぎょういろ色で、葉といえは、鼠みともつかず緑りともつかず、下手な鉄物かなもの細工を見るようで、しかも長いたけつぱいに頸を引き伸して、大団扇おおうちわのように空中に立ちはだかつて——どうも虫が好かぬ。長たらしい茎へ無器用にヒツつけたよ

うな薄きたない円葉をうるさく振りたてて——どうも虫が好かぬ。
この樹の見て快よい時といつては、ただ背びくな灌木の中央に一段高く聳^{そび}えて、入り目をまともに受け、根本より木末に至るまでむらなく樺色に染まりながら、風に戦^{そよ}いでいる夏の夕暮か、——さなくば空名^{なご}残りなく晴れわたって風のすさまじく吹く日、あおそらを影にして立ちながら、ザワザワざわつき、風に吹きなやまされる木の葉の今にも梢をもぎ離れて遠く吹き飛ばされそうに見える時かで。とにかく自分はこの樹を好まぬので、ソコデその白楊の林には憩わず、わざわざこの樺の林にまで辿^{たど}りついて、地上わずか離れて下枝の生えた、雨凌^{しの}ぎになりそうな木立を見たてて、さてその下に栖^{すみか}を構え、あたりの風景を眺めながら、ただ遊獵者

のみが覚えのあるという、例の穏かな、罪のない夢を結んだ。

何ン時ばかり眠ッていたか、ハッキリしないが、とにかくしばらくして眼を覚ましてみると、林の中は日の光りが到らぬ隈くまもなく、うれしそうに騒ぐ木の葉を漏れて、はなやかに晴れた蒼空がまるで火花でも散らしたように、鮮かに見わたされた。雲は狂い廻ひそわる風に吹き払われて形を潜め、空には纖ちりくも雲一ツだも留めず、大氣中に含まれた一種清涼の気は人の気を爽さわやかにして、穏かな晴夜の来る前触れをするかと思われた。自分はまさに起ち上りてまたさらに運だめし（ただし銃獵の事で）をしようとして、フト端然と坐している人の姿を認めた。眸子ひとみを定めてよく見れば、それは農夫の娘らしい少女であつた。二十歩ばかりあなたに、物思わ

し氣に頭を垂れ、力なきように両の手を膝に落して、端然と坐していた。旁々かたがたの手を見れば、半はむきだしで、その上に載せた草花の束ねが呼吸をするたびに縞しまのペチコートの上をしずかにころがっていた。清らかな白の表衣をしとやかに着なして、咽喉のど元と手頸のあたりでボタンをかけ、大粒な黄ろい飾り玉を二列に分ツて襟えりから胸へ垂らしていた。この少女なかなかの美人で、象牙をも欺あざむく色白の額おでこぎわで巾の狭い緋の抹額もくごうを締めていたが、その下から美しい鶉うずらいろ色で、しかも白く光る濃い頭髪を叮嚀とがにしたのがこぼれでて、二ツの半円を描いて、左右に別れていた。顔の他の部分は日に焼けてはいたが、薄皮だけにかえつて見所があった。眼まなざしは分らなかつた、——始終下目のみ使っていたか

らで、シカシその代り秀でた細眉と長い睫毛まつげとは明かに見られた。睫毛はうるんでいて、かたがた旁々の頬にもまた蒼あおさめた唇へかけて、涙の伝った痕あとが夕日にはえて、アリアリと見えた。総じて首つきが愛らしく、鼻がすこし大きく円すぎたが、それすらさのみ眼障りにはならなかつたほどで。とり分け自分の気に入つたはその面おもざし、まことに柔和でしとやかで、とり繕ろつた気色は微塵みじんもなく、さも憂わしそうで、そしてまたあどけなく途方に暮れた趣きもあつた。たれをか待合わせているのとみえて、何か幽かに物音がしたかと思うと、少女はあわてて頭を擡もたげて、振り反つてみて、その大方の涼しい眼、牝鹿のもののおどおどしたのをば、薄暗い木蔭でひからせた。クワツと見ひらいた眼を物音のした方へ

向けて、シゲシゲ視詰めたまま、しばらく聞きすましていたが、やがて溜息を吐いて、静にこなたを振り向いて、前よりはひときわ低く屈みながら、またおもむろに花を扱えり分け初めた。擦すりあかめたまぶちに、厳しく拘こうれん攣する唇、またしても濃い睫毛の下よりこぼれでる涙の雫しずくは流れよどみて日にきらめいた。こうしてしばらく時刻を移していたが、その間少女は、かわいそうに、みじろぎをもせず、ただおりおり手で涙を拭いながら、聞きすましてのみいた、ひたすら聞きすましてのみいた……フとまたガサガサと物音がした、——少女はブルブルと震えた。物音は罷やまぬのみか、しだいに高まって、近づいて、ついに思いきつた濶かっぱ歩の音になると——少女は起きなおった。何となく心おくれのした気色。

ヒタと視詰めた眼ざしにおどおどしたところもあつた、心の焦られて堪えかねた気味も見えた。しげみを漏れて男の姿がチラリ。少女はそなたを注視して、にわかにはハツと顔を赧あからめて、我も仕し合あわせとおもい顔にニツコリ笑ツて、起ち上ろうとして、フトまた萎れて、蒼ざめて、どきまぎして、——先の男が傍に来て立ち留つてから、ようやくおずおず頭を擡もたげて、念ずるようにその顔を視詰めた。

自分はなお物蔭ひそに潜みながら、怪しと思ふ心にほだされて、その男の顔をツクツク眺めたが、あからさまにいえば、あまり気には入らなかつた。

これはどう見ても弱冠の素封家の、あまやかされすぎた、給事

らしい男であつた。衣服を見ればことさらに風流をめかしているうちにも、またどことなくしどけないのを飾る気味もあつて、主人の着き故ふるしめく、茶の短い外がい套とうをはおり、はしばしを連れん翹ぎよういろ色いろに染めた、薔ばら薇いろ色の頸けい巻まきをまいて、金モールの抹も額ごうをつけた黒帽を眉まゆ深ふかにかぶつていた。白襯衣シヤツの角のない襟は用捨もなく押しつけるように耳みみ朶たをえて、また両頬を擦り、糊のりで固めた腕飾りはまったく手頸をかくして、赤い先の曲ツた指、Turquoise

(宝石の一種) 製の Myosotis (草の名) を飾りにつけた金銀の指環を幾個ともなくはめていた指にまで至ツた。世には一種の面貌がある、自分の觀察したところでは、つねに男子の気にもとる代り、不幸にも女子の氣かなに適あう面貌があるが、この男のかおつきは

まったくその一ツで、桃色で、清らかで、そしてきわめて傲慢ごうまんそう
で。己があらけない貌かおだちに故意わざと人を軽ろしめ世に倦うみは
てた色を装おうとしていたものとみえて、絶えずたださえ少ちいさ
な、薄白く、鼠ばみた眼を細めたり、眉をしわめたり、口角を引
き下げたり、しいて欠伸あくびをしたり、さも気のなさそうな、やりば
なしな風を装うて、あるいは勇ましく捲き上ツたもみあげを撫で
てみたり、または厚い上唇の上の黄ばみた髭を引張てみたりして
——ヤどうも見ていらぬほどに様子を売る男であツた。待合せ
ていた例の少女の姿を見た時から、モウ様子を売りだして、ノソ
リノソリと大股にあるいて傍へ寄りて、立ち止ツて、肩をゆすツ
て、両手を外套のかくしへ押し入れて、気のなさそうな眼を走ら

してジロリと少女の顔を見流して、そして下にいた。

「待ツたか？」ト初めて口をきいた、なおどこをか眺めたままで、欠伸をしながら、足を揺かしながら「ウー？」

少女はきゆうに返答をしえなかつた。

「どんなに待ツたでしょう」トついにかすかにいつた。

「フム」ト言ツて、先の男は帽子を脱した。さももつたいらしく

ほとんど眉ぎわよりはえだした濃い縮れ髪を撫でて、鷹揚おうようにあ

たりを四顧みまわして、さてまたソツと帽子をかぶツて、大切な頭をか

くしてしまった。「あぶなく忘れるところよ。それにこの雨だも

の！」トまた欠伸。「用は多し、そうそうは仕切れるもんじやな

い、そのくせややともすれば小言だ。トキニ出立は明日になツた

……」

「あした！」ト少女はビツクリして男の顔を視詰た。

「あした……オイオイ頼むぜ」ト男は忌々いまいましそうに口早に言つた。少女のブルブルと震えて差うつむいたのを見て。「頼むぜ

『アクーリナ』泣かれちやアあやまる。おれはそれが大嫌いだ」。ト低い鼻に皺を寄せて、「泣くならおれはすぐ帰ろう……何だばか気た——泣く！」「アラ泣はしませんよ」、トあわてて「アクーリナ」は言ツた、せぐりくる涙をようやくのことで呑みこみながら。しばらくして、「それじゃ明日お立ちなさるの。いつまた逢われるだろうネー」

「逢われるよ、心配せんでも。さよう、来年——でなければさら

いねんだ。旦那は彼得堡ペテルブルグで役にでも就きたいようすだ」、トすこし鼻声で気のなさそうに言ツて「ガ事に寄ると外国へ往くかもしれん」。

「もしそうでもなツたらモウわたしの事なんざア忘れておしまいなさるだろうネー」ト言ツたが、いかにも心細そうであツた。

「なぜ？ だいじようぶ！ 忘れはしない、ガ『アクーリナ』ちツとこれからは気をつけるがいいぜ、わるあがきもいい加減にして、おやじの言うこともちツとは聴くがいい。おれはだいじようぶだ、忘れる気遣いはない、——それはなア……イ」、ト平気で伸のびをしながら、また欠伸をした。

「ほんとに、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、忘れちやア

いやですよ」。ト少女は祈るがごとくに言ツた、

「こんなにお前さんの事を思うのも、慾徳づくじやないから……おとっさんのいうこと聴けとおいいなさるけれど……わたしにはそんなこたアできないワ……」

「なぜ？」ト仰^あお向けざまにねころぶ拍子に、両手を頭に敷きながら、あたかも胸から押し出したような声で尋ねた。

「なぜといッてお前さん——アノ始末だものオ……」

少女は口をつぐんだ。「ヴィクトル」は袂^{たもとどけい}時計の鎖をいらいだした。

「オイ、『アクーリナ』、おまえだツてばかじやあるまい」トまた話しだした、「そんなくだらんことをいうのは置いてもらおう

ぜ。おれはお前のためを思ッていうのだ、わかッたか？ もちろんお前はばかじやない、ヤッぱりお袋の性しょうを受けてるとみえて、それこそ徹頭徹尾てつとうてつびいまのソノ農婦というでもないが、シカシともかくも教育はないの——そんなら人のいうことならハイと言ッて聞てるがいいじやないか？」

「だッてこわいようなもの」。

「ツ、こわい。何もこわいことはちツともないじやないか？ 何だそれは」、と「アクーリナ」の傍へすりよッて「花か？」

「花ですよ」ト言ッたが、いかにも哀れそうであッた。

「この清涼茶は今あたしが摘つんできたの」トすこし気の乗ッたようす「これを牛の子にたべさせると薬になるッて。ホラ Bur-mari

gole —— そばツかすの薬。チヨイとごらんなさいよ、うつくしい
じやありませんか、あたし産れてからまだこんなうつくしい花ア
見たことないのよ。ホラ *Myosotis*、ホラ堇^{すみれ}……ア、これはネ、お
前さん^{まへさん}にあげようと思ツて摘んできたのですよ」「ト言いながら、
黄ろな野草の花の下にあツた、青々とした *Bluebottle* の、細い草
で束ねたのを取りだして「入^いりませんか？」

「ヴィクトル」はしぶしぶ手を出して、花束を取ツて、気のなさ
そうに匂いを嗅いで、そしてもつたいをつけて物思わしそうに空
を視あげながら、その花束を指頭でまわしはじめた。「アクーリ
ナ」は「ヴィクトル」の顔をジツと視詰めた……その愁^{しゆうぜん}然^{ぜん}と
した眼つきのうちになさけを含め、やさしい誠^{まごころ}心を込め、吾仏

とあおぎ敬う気ざしを現わしていた。男の気をかねていれば、あえて泣顔は見せなかつたが、その代り名残り惜しそうにひたすらその顔をのみ眺めていた。それに「ヴィクトル」といえば史丹のごとくに臥ねそべつて、グツと大負けに負けて、人柄を崩して、いやながらしばらく「アクーリナ」の本尊になって、その礼拝祈念を受けつかわしておつた。その顔を、あから顔を見れば、ことさらに作ツた優蹇恣睢えんけんしき、無頓着な色を帯びていたうちにも、どこともなく得々としたところが見透かされて、憎かつた。そして顧みて「アクーリナ」を視れば、魂が止め度なく身をうかれでて、男の方へのみ引かされて、甘えきつているようで——アアよかつた！ しばらくして「ヴィクトル」は、……「ヴィクトル」は花束

を草の上に取り落してしまい、青銅の框わくを嵌はめた眼鏡を外套の隠か袋くしから取りだして、眼あへ宛あてがおうとしてみた、がいくら眉しかを皺しかめ、頬を捻じ上げ、鼻まで仰あお向かせて眼鏡を支えようとしても、
——どうしても外れて手の中へのみ落ちた。

「なにそれは？」と「アクーリナ」がケゲンな顔をして尋ねた。

「眼鏡」と「ヴィクトル」は傲ごうぜん然として答えた。

「それをかけるとどうかなるの？」

「よく見えるのよ」。

「チヨイと拝見な」。

「ヴィクトル」は顔をしかめたが、それでも眼鏡は渡した。

「こわしちやいけんぜ」。

「だいじょうぶですよ」トこわごわ眼鏡を眼のそばへ持ってきて
「オヤ何にも見えないよ」トあどけなくいつた。

「そ、そんな……眼を細くしなくツちやいかない、眼を」トさながら不機嫌な教師のような声で叱ツた。「アクーリナ」は眼鏡を宛てがツていた方の眼を細めた。「チョツ、まぬけめ、そツちの眼じゃない、こツちの眼だ」トまた大声で叱ツて、仕替える間もあらせず、「アクーリナ」の持つていた眼鏡をひつたくツてしまツた。

「アクーリナ」は顔を赤くして、気まりわるそうに笑ツて、よそをむいて、

「どうでも私たちの持つもんじやないとみえる」。

「知れたことサ」。

かわいそうに、「アクーリナ」は太い溜息をして黙してしまつた。

「アア、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、どうかして、いっしょにいられるようにはならないもんかネー」トだしぬけに言つた。

「ヴィクトル」は衣服の裾で眼鏡を拭い、ふたたび隠袋に納めて、
「それやア当座四五日はちツとは淋しかろうサ」ト寛大の処置をもつて、手ずから「アクーリナ」の肩を軽く叩いた。「アクーリナ」はその手をソツト肩から外して、おずおず接吻した。「ちツとは淋しかろうサ」トまた繰返して言つて、得々と微笑して、

「だが己^{やむ}を得ざる次第じゃないか？　マア積ツてもみるがいい、旦那もそうだが、おれにしてもこんなケチな所にやられない、けだしモウじきに冬だが、田舎の冬というやつは忍ぶべからずだ、それから思うと彼得堡^{ペテルブルグ}、たいしたもんだ！　うそとおもうなら往^いツてみるがいい、お前たちが夢に見たこともないけつこうなものばかりだ。こう立派な建家、町、カイ社、文明開化——それや不思議なものよ！……」（「アクーリナ」は小児のごとくに、口をあいて、一心になツて聞き惚れていた）

「ト^{はなし}噺をして聞かしても」ト「ヴィクトル」は寝返りを打ツて、「むだか。お前にや空々寂々だ」。

「なぜえ、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、わかりますワ、

よく解りますワ」。

「ホ、それはおえらいな！」

「アクーリナ」は萎れた。

「なぜこのごろはそう邪慳じゃけんだろう？」ト頭をうなだれたままで言ツた。

「ナニこのごろは邪慳だと……？」ト何となく不平そうで「このごろ！ フfumこのごろ！……」

兩人とも暫時無言。

「ドレ帰ろうか」ト「ヴィクトル」は臂ひじを杖に起ちあがろうとした。

「アラモウちツとおいでなさいよ」ト「アクーリナ」は祈るよう

に言ッた。

「なぜ? ……暇乞いならモウこれですんでいるじゃないか?」

「モウちツとおいでなさいよ」。

「ヴィクトル」はふたたび横になツて、口笛を吹きだした。「アクーリナ」はその顔をジツと視詰めた、しだいしだいに胸が波だツてきた様子で、唇も拘攣こうれんしだせば、今まで青ざめていた頬もまたほの赤くなりだした……

「ヴィクトル、アレクサンドルイチ」トにじみ声で「お前さんも……あんまり……あんまりだ」。

「何が?」ト眉を皺めて、すこし起きあがツて、キツと「アクーリナ」の方を向いた。

「あんまりだワ、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、今別れたらまたいつ逢われるかしのだから、なんとか一ト言ぐらい言ツたツてよさそうなものだ、何とか一ト言ぐらい……」

「どういえばいいというんだ？」

「どういえばいいかしらないけれど……そんなこたア百も承知しているくせに……モウ今が別れだというのに一ト言も……あんまりだからいい！」

「おかしなことをいうやつだな！ どういえばいいというんだ？」
「何とか一ト言ぐらい……」

「エーくどい！」ト忌々しそうに言ツて、「ヴィクトル」は起ちあがツた。

「アラクに……かにしてちようだいよ」ト「アクーリナ」は早や口に言ツた、かろうじて涙を呑みこみながら。

「腹も立たないが、お前のわからずやにも困る……どうすればいいというんだ？ もともと女房にされないのは得心づくじやないか？ 得心づくじやないか？ そんなら何が不足だ？ 何が不足だよ？」トさながら返答を催促さいそくするように、グツと「アクーリナ」の顔を覗きこんで、そして指の股をひろげて手をさしだした。「何も不足……不足はないけれど」ト吃どもりながら、「アクーリナ」もまた震える手先をさしだして、「ただ何とか一ト言……」

涙をはらはらと流した。

「チヨツ極きまりを始めた」、ト「ヴェクトル」は平気で言ツた、後

から眉間^{みけん}へ帽子を滑らしながら。

「何も不足はないけれど」ト「アクーリナ」は両手を顔へ宛てて、
睨^{すす}り上げて泣きながら、ふたたび言葉を続^ついだ、「今でさえ家に
いるのがつらくツてつらくツてならないのだから、これから先は
どうなることかと思うと心細くツて心細くツてなりやアしない：
…きつとむりやりにお嫁にやられて…：苦勞するに違いないから
…：…」

「ならべろならべろ、たんと並べろ」ト「ヴィクトル」は足を踏
み替えながら、口の裏で言ツた。

「だからたツた一ト言、一ト言何とか…：『アクーリナ』おれも
…：お、お、おれも…：…」

不意に込み上げてくる涙に、胸がつかえて、言いきれない——
「アクーリナ」は草の上へうつぶしに倒れて苦しそうに泣きだした……総身をブルブル震わして頂門で高波を打たせた……こらえに堪えた溜め涙の関が一時に切れたので。「ヴィクトル」は泣くずおれた「アクーリナ」の背なかを眺めて、しばらく眺めて、フト首をすくめて、身を転じて、そして大股にゆうゆうと立ち去った。

しばらくたつた……「アクーリナ」はようやく涙をとどめて、頭を擡^{もた}げて、跳り上ツて、あたりを視まわして、手を拍^うた、跡を追ツて駈^かけだそうとしたが、足が利かない——バツタリ膝をついた……モウ見るに見かねた、自分は木蔭^{こかげ}を躍りでて、かけよう

とすると、「アクーリナ」はフト振りかえツて自分の姿を見るやいなや、たちまち忍び音にアツと叫びながら、ムツクと跳ね起きて、木の間へ駆け入ツた、かと思うとモウ姿は見えなくなつた。草花のみは取り残されて、歴乱としてあたりに充ちた。

自分はたちどまつた、花束を拾い上げた、そして林を去ツてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂ツて、射す影も蒼さめて冷かになり、照るとはなくてただジミな水色のぼかしを見るように四方に充ちわたツた。日没にはまだ半時間もあるうに、モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄ろくからびた刈科かりかぶをわたツて烈しく吹きつける野分のわきに催されて、そりかえツた細かな落ち葉があわただしく起き上り、林に沿うた往来を横ぎつて、自分の

側を駈け通つた、のらに向いて壁のようにたつ林の一面はすべて
 ざわざわざわつき、細末の玉の屑を散らしたように、かがや煌きはしな
 いが、ちらついていた、また枯れ草、はぐさわら莠、藁の嫌いなくそこら一
 面にからみついた蜘蛛の巣は風に吹き靡なびかされて波たつていた。

自分はたちどまつた……心細くなつてきた、眼まなこに遮さかる物象はサ
 ツパリとはしていれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれは
 てたうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじさが見透かさ
 れるように思われて。小心からずなが重おもそうに羽ばたきをして、烈し
 く風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首を回らして、
 横目で自分をにらめて、きゆうに飛び上つて、声をちぎるように
 啼なきわたりながら、林の向うへかくれてしまつた。鳩が幾羽とも

なく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んできたが、フト柱を建てたように舞い昇つて、さてパツといっせいに野面に散つた——ア、秋だ！ 誰だか禿山の向うを通るとみえて、から車の音が虚こ空くうに響きわたつた……

自分は帰宅した、が可哀そうと思つた「アクーリナ」の姿は久しく眼前にちらついて、忘れかねた。持帰つた花の束ねは、からびたままで、なおいまだに秘蔵してある………

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」 坪内逍遙・二葉亭四迷集」 集英社

1969（昭和44）年12月25日初版

入力：j.utiya

校正：八巻美恵

1998年7月28日公開

2006年1月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

あいびき

イワン・ツルゲーネフ Ivan Turgenev

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 二葉亭四迷訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>